

イチゴ (露地) (黒ボク土)
 (土壤肥料)

本作目は、栄養生長と生殖生長が完全転換する型である。育苗期は栄養生長を促進させるため、ある程度の窒素を必要とする。定植後は生殖生長が中心となるため、残存窒素が多くならないように管理し、品質の高い果実生産をする必要がある。根系は比較的浅く乾燥や多肥の影響を受けやすい。このため、有機物に富んだ壤土など、物理性の良い土壤が生育に適している。堆肥などのすき込みは顕著な効果を示す。また、土壤の水分はやや多めが適し、適正な草勢管理を心がける。

[病虫害・雑草防除]

土壤病害対策として連作を避け、排水を良好に保つ。苗は健全な親株から採取し、育苗期の病虫害発生には十分注意する。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
有機質資材施用技術	土壤診断に基づいた低成分含量堆肥(稲わら堆肥及び落葉堆肥等で、窒素、カリ含量が1%以下の完熟したもの)の施用を基本とする。 肥料成分含量の高い畜産系堆肥の施用に当たっては成分量を十分考慮し施用する 緑肥作物を利用する。	堆肥 2～3t/10a
化学肥料低減技術	肥効調節型肥料と速効性肥料とを組み合わせ、養分吸収特性に対応した施肥成分の供給を行う。 基肥は有機質肥料の施肥を行う。	成分量で施肥基準以下 有機質肥料併用の場合には化学肥料低減率20～50%減
化学農薬低減技術	雨よけ栽培をおこなう。 (対象：炭疽病) 微生物農薬を利用する。 (対象：灰色かび病、うどんこ病、炭疽病) 対抗植物(クロタラリア、ギニアグラス等)を利用する。 (対象：ネグサレセンチュウ) マルチ(光反射、シキワラなど)を利用する。 (対象：アブラムシ類、雑草、灰色かび病など)	慣行使用回数の20%減
その他の留意事項	堆肥中の成分含量を考慮して堆肥投入量を調節するか、基肥量を加減する。 基肥家畜糞たい肥の多施用は、亜硝酸ガス障害の原因となるので注意する。 育苗後半の養分供給が過剰にならないように、肥効調節型肥料や葉面散布を行い、むやみな追肥は避ける。 多施用による濃度障害が問題とならないよう施肥管理に注意する。 溶脱防止を目的としたきめ細かな灌水、施肥法をとる必要がある。 盛り土などが行われている圃場では、その客入土壤の改良を行う。	

イチゴ (施設) (黒ボク土)
 (土壌肥料)

本作目は、栄養生長と生殖生長が完全転換する型である。育苗期は栄養生長を促進させるため、ある程度の窒素を必要とする。定植後は生殖生長が中心となるため、残存窒素が多くならないように管理し、品質の高い果実生産をする必要がある。根系は比較的浅く乾燥や多肥の影響を受けやすい。このため、有機物に富んだ壤土など、物理性の良い土壌が生育に適している。堆肥などのすき込みは顕著な効果を示す。また、土壌の水分はやや多めが適し、適正な草勢管理を心がける。灌水により成分の流出に注意する。
 [病害虫・雑草防除]

育苗期から病害虫防除は的確に行い、定植時に罹病株、害虫寄生株を施設内に持ち込まないようにする。施設内の湿度が高くなりすぎると病気が多発するので適正に維持管理する。夏から晩秋にかけては施設開口部に防虫ネットを張るなど害虫の侵入を防ぐ。1月以降ハダニが発生しやすくなるが、開花期には受粉昆虫(ミツバチ)を導入するため、生物農薬を導入するなどし、化学農薬の使用を削減する。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
有機質資材 施用技術	土壌診断に基づいた低成分含量堆肥(稲わら堆肥及び落葉堆肥等で、窒素、カリ含量が1%以下の完熟したもの)の施用を基本とする。 肥料成分含量の高い畜産系堆肥の施用に当たっては成分量を十分考慮し施用する 緑肥作物を利用する。	堆肥 2~3t/10a
化学肥料 低減技術	肥効調節型肥料と速効性肥料とを組み合わせ、養分吸収特性に対応した施肥成分の供給を行う。 基肥は有機質肥料の施肥を行う。	成分量で施肥基準以下 有機質肥料併用の場合には化学肥料低減率20~50%減
化学農薬 低減技術	開口部やサイドを防虫ネットで被覆する。 (対象:ヨトウムシ類、アザミウマ類など) 微生物農薬を利用する。 (対象:灰色かび病、うどんこ病、炭疽病) 天敵農薬を利用する。 (対象:ハダニ類、アブラムシ類など) 対抗植物(クロタラリア、ギニアグラス等)を利用する。 (対象:ネグサレセンチュウ) マルチ(光反射、シキワラ等)を利用する。 (対象:アブラムシ類、雑草、灰色かび病など) 夏季に太陽熱土壌消毒を行う。 (対象:土壌病害虫、雑草など)	慣行使用回数の 20%減
その他の 留意事項	堆肥中の成分含量を考慮して堆肥投入量を調節するか、基肥量を加減する。 基肥家畜糞たい肥の多施用は、亜硝酸ガス障害の原因となるので注意する。 育苗後半の養分供給が過剰にならないように、肥効調節型肥料や葉面散布を行い、むやみな追肥は避ける。 多施用による濃度障害が問題にならないよう施肥管理に注意する。 溶脱防止を目的としたきめ細かな灌水、施肥法をとる必要がある。 盛り土などが行われている圃場では、その客入土壌の改良を行う。 塩類が集積した場合には、緑肥などの栽培により、脱塩を図る。集積の程度の軽い場合には緑肥として土壌にすき込むが、激しい場合には圃場外に緑肥を搬出する。	